

全三十七

南柯夢

貳編

四

へ遠13
1280
11



1280
11

映春

村田

三十一全傳
古夢南柯後記卷之三

東都

曲亭馬琴編次

前快第三



雨後の月魄

叢蘭をびらんとすれば秋風を紙破る忠臣諫人とせんが庸主
 これを拒むるは忠義の物とあるとも。乱離の人とあるとある人人生
 ありて五十年三寸呼吸絶えが萬事休とてあつて情も骨も朽
 たる。残るは後の名のさるるや。却て赤根も進み松を土市をさる
 米谷紙投て封じし縁て宿禰の方あれは道とから神社仏閣をみる毎は
 其処まうて祈念まじりて左よ右なるも果敢とて昨の雨よ及まの
 ぬるけまは奴隷が扇紙助んとて轆子のあつるから歩ゆるぞゆく遅と
 春の夕ま霞に也賤まが離色の紅梅も日景映くを色とまは紙
 春の夕ま霞に也賤まが離色の紅梅も日景映くを色とまは紙

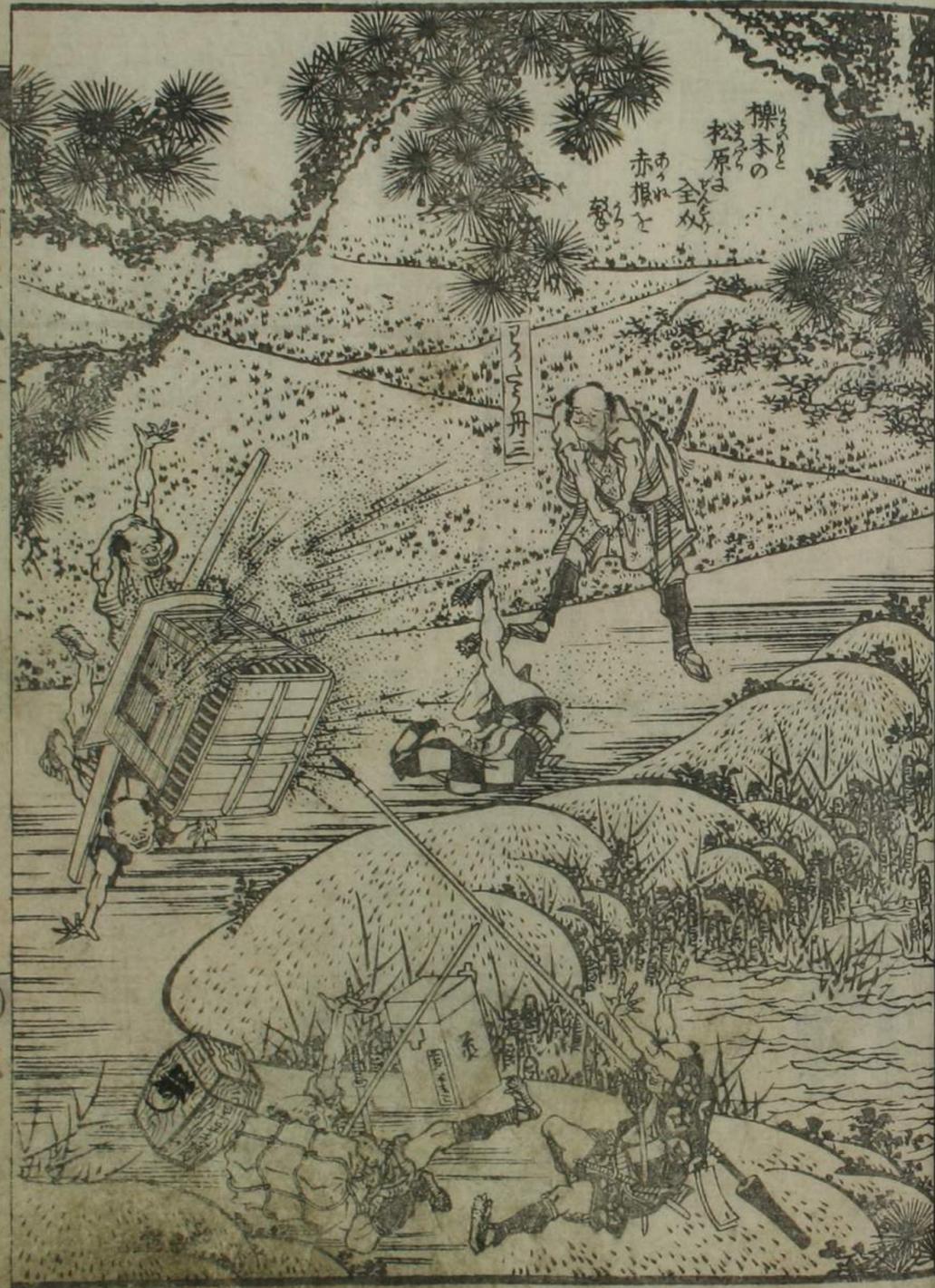
百可後已巻三



何々あれが、風月、の不徳、や、家宰の罪、ある。それ、昔も、宿老の屋とて、
 かる老女を救、む、と、大なる不徳、あれ、あつた、今市へ送、んと、せ、これより
 平城へ移、す、知、る。丹三、この老女と、し、か、病、る、へ、扶、けて、岩屋谷の藤村
 の、村長が、宿所へ、お、つ、ゆ、め、これ、の、病、氣、の、音、あ、れ、は、汝、連、よ、し、も、れて、和、途、の
 八、懐、宣、意、系、清、し、且、は、て、追、著、べ、と、い、つ、と、い、つ、と、せ、丹、三、の、眉、こ、ら、舞、舞、め、
 和、途、へ、の、こ、より、十六、六、町、あり、よ、や、私、の、物、指、こ、と、て、後、者、と、い、く、俱、
 ち、ん、の、便、る、れ、と、い、お、な、と、い、も、甚、然、か、め、さ、る、べ、今、この、老、女、が、ま、ち、世、で、
 この、月、さ、つ、の、日、を、暮、し、て、独、り、ん、の、実、は、危、し、と、い、つ、せ、もの、い、ど、う、ら、微、笑、こ、
 丹、三、の、言、を、し、り、て、と、や、狂、し、と、と、学、ん、ぞ、じ、が、腰、に、六、兩、の、あり、後、幾、隊、の、
 野、伏、の、容、を、撞、見、し、も、い、つ、で、害、怖、さ、と、の、あ、ら、ま、さ、る、と、い、つ、を、経、日、病、ま、
 没、り、ぬ、い、そ、び、く、と、焦、燥、が、主、命、脱、る、よ、な、ら、う、て、丹、三、の、唇、を、咬、み、か、ら、

領をゆとる思つて後者おのくまは對ひて別を替禱子と擧記し
 餘を肩掛の李と扛擔ひつ。標李のから死んで別を去んとよむ
 されよすも進遠く。丹三を喚ぶ。これあふのあはけ小刀をさか
 小雲時汝は領くべ。元は汝も志する如く。恩賜の二刀あるが等用也
 するともあれといつ。丹三後方をせんう。あつては約李も著れる。夾まんの
 中刀をさうゆゆんと真らしてのを推禁め。約李とさんんがわ。只
 須臾の程ある。汝が腰の刀と換まん。ごを件のおん佩刀を丹三小
 邊とよけ。丹三のまのが中刀を取てまは進。件のおん佩刀を
 茶く。うち戴きて腰に帯。まは進のころのそく。丹三病お
 老女を道にさらむ。ひて勅ま。衆皆ゆは。と怪。一。まは。の
 後者ハミの流ともよ。改を低。遂は。まは。て。まは。の。後者ハミを

本をさす。中目送る。これ今和途の八幡宮へ詣るとも。今宵二更の
 比及。岩屋村人到着。彼知。茶谷の遠う。後者亦。長途よ
 疲勞。熟睡。まは。と。出。接。潜。本精家の辺。赴。ころ
 ま。腰。切。居。あ。き。物。の。怪。の。宗。派。負。お。の。づ。ら。続。井。の
 家の安寧。まは。この曉。臨終。まは。家。の。妻。や。子。が。つ。あ。ん
 不便。現。若。の。武。夫。の。ひ。入。滅。の。道。よ。と。ひ。ま。ら。つ。は。く
 杖。曲。ら。ぬ。ま。は。一。ま。は。暁。を。め。づ。て。い。ま。ま。は。丹。三。ま。は。糖。子。に
 病。臥。せる。老。女。ま。は。物。を。して。勅。慰。め。標。李。と。松。子。派。十。町。あ。ま。り。由。く
 行。よ。技。察。際。る。れ。並。松。の。梢。より。日。の。暮。ま。ま。は。心。を。か。か。つ。と。晴。し。
 さて火を漬りけ。続松よ。まは。ま。は。衆。皆。や。く。道。を。か。と。め。て。亦
 八九町。由。く。行。よ。月。の。出。づ。ま。は。ま。は。の。知。の。特。は。路。狭。く。若。松。小。松



おろれば忙と。とてあゝうらり領する。おん佩刀を引抜て癖者が
脛を刀尖さかりに下と破る紙拂い除く硝薬で打大刀風乃
烈しは丹三矢傷の鳥銃砲痕の特は痛と。進退も自在なるに
巻ややく衰て背を破き胸前を劈き躍くと癖者の入るうらと
逆倒し顯を隻足は踏居て吹くけとと刺刃を條る鮮血と
そのふ天小由新のさう潮や松の杪をさるる月をうち仰だる面
庸人あゝばんえふたり。

木末の点滴

國は君もけまば四民聚る隊は主もけまば從願全うらば
すま進が從者ホハ。さる悉曉せよあふざれど御よその主ふと
られて人のさうひらるるだ。まの周夜は跡絶る。松末を過るる

只管に歩紙のそんとおりの。前後せんるん連るは。あゝるる
打つれは。又は教は。幾ひのんえ。或は。旦の。席長。避は。と。或は。の
る侍と。ま。進。よ。昔。んと。四。零。八。落。よ。逃。失。は。遂。よ。丹。三。を。撃。り。り。め。じ。後。不
癖者の丹三をさのまに刺殺せ。血刀引提て橋子を勢ひ猛く倍と
眼へ怨敵赤根羊之進を呼吸のうらうらも受け往時亨禄元年十月
端の六月浪速る相合橋よ。汝がわ小勢もれたる。今市全八郎が二子全
といひが。父が。殺れ。その。ゆ。の。僅。の。襦。袢。の。中。小。あり。され。が。幸。長
たる。去年の。冬。ま。ま。と。父。を。と。ろ。ど。仇。を。と。ろ。ど。近。曾。養。母。の。物。が。り。り。ま。ま。
共。よ。天。を。載。る。汝。が。子。を。と。ろ。ど。て。あ。れ。ば。猛。よ。大。和。住。居。を。移。し。この
春。より。あ。の。び。く。小。担。勢。んと。あ。れ。ば。も。身。さ。へ。貧。しく。由。縁。も。あ。れ。ば。
城中へ入る便を。得。せ。老。たる。養。母。の。鮮。と。さ。れ。ば。公。の。も。の。ら。で。然。止。し。す。

宿怨を執つて。時至て。女主人の仰を受け。夜を日不待して。米谷へ
 赴く。まのそをゆも傳は。今朝より跡を跟らねども。汝が後者夥か
 か。くく。まをやま。の松原を過る。白の暮多んと推量。捷徑より
 走り先立ち。小杉と久しう。の心を受らん。と声高。小罵の
 の。橋子の戸を跟ひら。月の光。の隈も。さ。橋子の裡を
 鮮血を塗れ。卧る。の仇人。さ。養母。晩。長。り
 仰さ。小駭。倒。と。泥。こ。を起。中。母。全。み。て
 い。何。の。橋子。は。乗。ら。れ。て。坐。た。る。が。う。へ。を。と。中。も。ら。れ。た。あ。や
 仇人。小謀。られ。ん。進。退。無。心。の。時。を。ゆ。既。は。怨。を。復。せ。と。ひ。り。の。を
 ら。い。と。淺。ま。と。も。朽。ち。と。の。の。紫。の。あ。く。小。恨。り。と。も。今。又。は。
 の。ひ。と。た。た。た。天。の。縛。母。の。教。は。後。に。罰。の。目。前。五。逆。の。罪。人。の。八。千。な。び

百千遍。あ。の。才。が。恨。と。と。蹊。踏。し。つ。声。を。惜。せ。草。を。軋。て。哭。が。中。中
 小。涙。を。拭。ひ。て。卧。た。る。母。を。抱。え。起。し。喃。母。の。涙。は。淺。く。を。い。は。さ。る。を。鬼。は。は
 る。と。勤。つ。又。咄。び。活。つ。手。を。ら。橋。子。を。扶。出。す。あ。の。が。腰。小。結。び。た。三。度。拭
 引。解。て。瘡。口。を。楚。と。結。び。又。高。中。う。咄。活。る。の。声。を。め。て。耳。を。入。り。て。や。細
 中。小。眼。を。睜。王。和。殿。の。仇。人。を。覺。た。が。て。か。ま。丸。き。杖。母。と。咄。を。し。れ。ま。い
 づ。と。勿。論。と。の。が。幻。釋。と。れ。祖。母。さ。の。祖。父。さ。の。り。と。も。小。家。を。捨。棄。落。を
 出。漢。西。の。あ。と。と。通。じ。れ。後。小。却。れ。あ。ひ。その。と。れ。和。殿。の。祖。母。さ。の。が。吾。情
 小。憑。ま。ば。え。て。汝。且。く。を。受。ま。さ。る。べ。れ。人。の。子。と。も。可。し。と。も。宣。へ。り。が。汝。が
 こ。ま。ま。の。う。ら。け。の。ら。せ。さ。る。と。れ。の。世。は。つ。れ。母。と。咄。れ。る。と。咄。が。假。初。の。私
 言。が。口。の。う。ま。ま。も。吾。情。の。あ。は。和。殿。の。主。り。主。の。孫。あり。より。や。仇。人。と。咄。ひ
 た。が。く。傷。る。と。め。れ。が。と。五。逆。十。惡。と。の。う。ら。ん。や。を。ゆ。ぬ。と。の。う。ら。ん。と。日。未

小変る言の葉の巖と正した小全女は悔羞る母の慈悲玉る人全は熱湯
 の沸くる如く涙を掃ひさ空のさるへ全女を悪虐残忍の人よとと身を殺
 しくも今更小言葉を殺て不孝の罪を脱とてのり小丁を如此思石仁慈
 の浅からぬも浅ましや。おん身が主の孫もゆめれ襦袢の中より養れわ
 人のまよりたれがねるらぬ母より子より乳母とのりともあつて母といふ
 字に別られん言さる夷狄の國より親を殺すゆありとらう。あつて
 人よちらぬ人と生さる人よりぬ人といわれ。一日ゆの身を容る里あらんや
 うこそ中今の世は又岐婆ありとも扁鵲ありとも。その深瘻をのりて救ふ
 とて濟まんや。おんあつて母の前は後も果さぬ息の下よ又小伏て犯せる罪の
 百が一を賤くし。許さるあつて口裁刀を逆まよつては。あつて
 吐嗟と身の苦しさを忘るまよは。携持禁めこの物に。あつて
 うせ身の息のつある吾儕を損す。物とらう情うと怒られ。あつて
 小も右も全女を助んとて。あつて母よのりて。あつて
 竹鋸小刀を挽き木の小鼻ら。あつて。あつて
 を重るよ似られども。あつて。あつて
 られを公す。あつて。あつて
 せられたり。あつて。あつて
 打れたる瘡。あつて。あつて
 びどその虚言。あつて。あつて
 を向死とらう。あつて。あつて
 全女の疑ひつ。あつて。あつて
 ちうえんが咽喉。あつて。あつて

うせ身の息のつある吾儕を損す。物とらう情うと怒られ。あつて
 小も右も全女を助んとて。あつて母よのりて。あつて
 竹鋸小刀を挽き木の小鼻ら。あつて。あつて
 を重るよ似られども。あつて。あつて
 られを公す。あつて。あつて
 せられたり。あつて。あつて
 打れたる瘡。あつて。あつて
 びどその虚言。あつて。あつて
 を向死とらう。あつて。あつて
 全女の疑ひつ。あつて。あつて
 ちうえんが咽喉。あつて。あつて

めも眩らろ消るがた涙の玉やあけららん志渡の浦曲の蜚るらるる。さて乳のやは
 残四五才づきも灸所の痛多あり。至成の月を燭つてとえてあつびるる。
 鉄炮の寃違て橋子の戸を打抜たる。よられの心、刀瘡憑りたる。天神
 地祇も捨ぬる。もろらども母を殺せ罪を辛く脱きたり。これをうまうと
 ろふもあは悲しれた母の絶命あり。進這奴全女が母と知て。誰引出
 刺殺して。橋子又隠せ。不幸はてま。緯の絶ぬるや。らん。もつて赤うへを。
 わ。まを仇人よ。あらとらん。実父養母の讐。敵累る。怒い。這奴が頭を粉に碎きて
 醜なる。あはとも。飽む赤根が往方あり。米谷小勝負を決せん。さうと。小勝
 立る。何。揺り。詰たる。巻の上。な。なる。涙の玉。霰。碎。つ。つ。物。あ。の。孝。子。の。歎
 どの。れ。る。る。晚。縮。ひ。苦。し。息。の。下。ま。が。子。の。顔。を。う。ち。瞻。り。縁。故。を。あ。り。あ。り
 祐。の。の。疑。ひ。の。程。な。れ。と。世。は。誠。の。人。の。心。を。う。め。の。さ。ら。山。さ。ら。く。小。和。殿。を。讐。言

とも。これ。を。又。和。殿。の。母。と。も。赤。根。の。の。ら。る。べ。ん。中。う。の。め。ら。ら。る。べ。男。見。の。生。平
 と。い。ひ。あ。ら。う。道。を。ら。ぬ。故。に。移。れ。ぬ。の。父。の。心。を。復。ん。と。こ。の。大。和。洛。ら。ん。里。住
 活。業。は。假。托。て。毎。日。は。平。城。交。加。つ。彼。人。を。寃。め。を。藤。子。う。猜。し。な。れ。ど。も。流。石
 小。う。ち。の。あ。は。の。さ。ら。ら。ぬ。牙。の。と。ら。ひ。あ。ら。禁。る。も。あ。り。は。昨。々。う。和。殿
 の。気。を。特。更。は。怒。を。含。今。朝。未。明。を。遠。く。刀。を。さ。隠。り。り。ち。て。更。王。の。を
 あ。い。づ。い。づ。ま。ん。く。む。り。と。あ。り。う。ち。も。あ。ら。れ。ど。跡。追。て。日。の。暮。る。ま。も。彼。此。と
 索。め。れ。ど。竟。は。え。あ。つ。い。つ。疲。勞。て。忽。ち。は。瘡。を。胸。を。さ。う。塞。と。ら。の。松。原。の
 の。あ。ら。る。道。次。う。ち。臥。たり。折。し。ゆ。め。れ。旅。者。武。士。の。後。者。八。九。人。を。お。く。橋。子
 を。擡。ら。し。ら。が。吾。儕。を。え。ん。と。あ。く。憐。み。可。憐。小。同。ろ。小。を。病。は。重。死
 頭。を。擡。り。不。圖。燈。櫃。を。向。上。と。は。鏡。井。の。家。臣。赤。根。半。之。進。と。牌。を。打。たり。
 送。は。面。の。認。ら。ぬ。と。公。は。恥。る。と。の。と。ま。れ。ば。名。告。を。も。せ。ん。只。管。は。推。辞。し。れ。ど。



古今
 福れりんやらのそ
 つひらんやらのそ
 むくも敷きさろ
 りりやれるらめ

百可後己三三



仇人^{あいつ}と粗^{あつ}怒^どん
 とく^{とく}更^{さら}み
 怒^{いかり}を
 ち^ち吹^ふ

ち^ちとん
 た^たあ
 か^かあ
 た^た

お^お福^{ふく}

全^{ぜん}女^{にょ}

百可後己三三

彼人元末上級奴ひを憐むらる深くと豫言しよ一点違ひなきも小勳も真
 今小説論しく吾侪を橋よ又扶桑の岩屋村ある長が宿所へおておけと
 私卒丹とてやんよ言えおれぬ和途ある神社へ宿願の音のれが立ちがら
 糸らんとして後者俱せむ彼死する通も列れまぬひたあて道すがらぬ
 丹とてつゞく人のひと町噂も勳も慰め橋子の内なりける腋紗物うち披
 て梨子ひららうやうゆられぬ殿のめりたまさる春の梨子のゆづらるあらんす
 湯ばられをなぶぶとてあのが刀は著たりける刀をそそえとらしたる主といひ
 家隸といひやくまむ好意あつるものせつある過世の悪業小や。丹子の
 実父の腹きたるあかる仁者を謀らんとて可惜命を預いたるをいふ
 全奴が父をかりへ生憎みぬの道理も言ともあむらるぬの旅されぬ途
 小く粗雑あんとて宿をぬは疑ひぬあまうとらとあふもを瘡まきくよう

誥す。刃の苦しは又徳祐ども。老か命つも惜ん赤根ぬは恙あつれまぬも
 毎ふゆれり。と苦しれまに神佛へ入らぬ嘗て合し。禱る外化ありは
 暮ていといと樹下暗れたら松原をうがら。打ちけられたる鉄炮も丹子のぬ
 天庭よ仆も瀧子よは打抜られど却吾侪の恙あり。この全奴が所ぬ小すを
 らめてを果さぬぬる不跟寛くともさびへ命も終よあら虫の火虫のあら
 焼るど。彼人のゆは死やせん理せめても苗らぬら子を懸練んらう。らんで
 死ば彼人よかのが誠もとらぐべく全奴も仇報せおひとまるとりや。とらの刃
 一を恩愛と羨望よりえは臂近る彼刀を採取王咽喉乳の个
 辟けども。老の養のうひるさ消果もせぬ月の夜野も山もあはれま
 なるしと猜してたどいみ声のや弱きども。命つれぬは折葉の落るん程も
 まをわぬ全奴のゆく毎よ竹と懸んさぶらぬ絞ものぬ布子のそをせ

去づく顔あり當は。牙を蓋つ。牙を恨む。憂ふのみならず。雄が猛死をも
軟果て碎る胸を敵死居喃母の室の所。親の教を受ず。却親を
誑たる。かのぶの。劔りて仇をの。養母を喪ふ。世の不孝の過世の悪業天
罰あり。のる。れと悪入る。とも父の仇人を終は。の。腹を惜らね
字の恩の大和のあり。ある。山より高れ母をを。非命あり。殺し。の。月日誠を
照さね。欲う。小ても。母の。さ。の。惠も受ね。半之進を厚く。とひく。命
た。惜め。の。婦人の。仁。物。よ。る。ら。の。ゆ。め。と。詰。ま。バ。僅。よ。う。ち。点。頭
非此向とんと。と。ひ。い。り。め。よ。い。り。ぬ。の。め。や。ん。と。の。ハ。恥。わ。か。ず。し。た。り。め。あ。ら。
せめて。今。般。の。罪。滅。し。小。の。か。う。入。詳。は。告。げ。ら。ん。と。か。父。の。股。部。氏。あ。て。原。由。緒
ゆる。武士。あり。が。の。る。る。な。や。退。糧。し。て。城。下。郡。佐。保。の。庄。は。僑。居。し。細。死。煙
を。立。の。人。假。初。を。が。ら。十。餘。年。幸。な。れ。り。は。幸。あ。り。て。父。母。り。ろ。とも。は。ほ。月。よ。

僅は病く。身まろ。あひぬ。その時。吾侪の二八の秋。只一個の婿あり。同郷
る。柴。賣。の。六。と。の。者。の。妻。と。り。く。を。つ。た。り。父。母。あ。り。な。り。あ。い。後。吾。侪
の。婿。夫。は。養。老。と。し。二。年。の。月。日。を。こ。ん。よ。う。な。時。の。悲。心。ひ。よ。く。近。き。わ。り。よ
ひ。と。り。を。る。樵。夫。父。四。郎。と。の。小。社。伎。と。ち。の。び。の。夜。の。数。り。さ。り。ぬ。え。末。件。の
私。夫。の。酒。を。嗜。牌。を。投。牙。を。こ。か。す。よ。る。ん。程。よ。あ。り。の。り。の。并。も。着。り。え
の。布。子。も。貸。盡。し。刺。婿。と。婿。夫。の。衣。服。調。度。を。盗。切。し。る。私。夫。が。り。り
ぬ。柱。び。の。代。と。せ。り。さ。り。發。覺。て。面。目。さ。さ。り。夫。り。ろ。とも。佐。保。の。庄。を。逐。電。し。一。年
の。ま。り。彼。此。を。さ。ら。ひ。て。や。う。や。小。浪。速。津。又。是。を。駐。め。り。小。十。年。を。あ。る。嶺。南。で
買。刃。り。り。と。る。清。め。れ。ば。夫。婦。共。稼。は。拵。不。ど。も。鐵。鈔。三。丈。ゆ。め。の。こ。ら。ず。
と。ま。り。奉。り。一。子。の。坐。草。も。く。る。り。つ。せ。り。る。楫。の。ま。ら。ら。ね。る。は。乳。の
出。る。を。幸。よ。京。へ。上。り。て。刀。屋。へ。乳。母。の。糸。り。つ。や。て。不。殿。を。育。り。あ。り。る。よ

海可後 已ま一

のまじり
 婿夫半六どのの不憶僥倖のりて。続井殿不見糸一。五條の縣主とまりは。
 その比灰は傳言一が。婿の論條どの。その次の年又身まうりあへ。才の保て
 勸解んも既又便著を失ひつ。富る縁者を有るがら。才の貢一とをゆも
 昔ん故つれもどん介後の居立の道の結果また大和津の國まきうらむも世を
 憚まは故郷のそらつとをくくるやと。どん又つけて奇に半六どのを汲引
 あひ一とつたえたる。典借の。前妻は由縁ある口屋(奉公)。が外任前の
 半七との同僚るり。今市全八どの遺子こる。和殿を子と。母とつら。こま
 これ脱まぬ因果とどんいよくうらまうを。匿りのやら大和の赤根氏の
 るとつら。耳引立て支漏は。と物ぢく。赤根親子が浮沈のよ。又全八どの
 と外任の口録のうをさへ。おほりうらむ。けもやど。あら。白一とありつるよ。
 法施米よりうらむも。受一袋の口より。同をわたり。彼人と和殿のまき。の好
 友を告たり。より。忽地は父の仇を。報ん。と。用未あ。の。和殿。を。徳。氣。さ。

と。も。報。ま。ぬ。仇。あ。れ。つ。ど。い。絶。え。と。ら。う。も。報。一。さ。よ。如。此。の。美。の。さ。
 う。い。の。昔。の。夏。身。の。と。ま。よ。奈。良。坂。や。児。手。揃。の。わ。ら。ね。ど。も。親。子。の。
 裏。赤。根。が。の。よ。看。と。り。兵。彼。人。の。矢。面。は。立。て。ら。の。身。を。殺。ん。と。ど。ん。
 誠。を。捨。あ。ぬ。神。と。佛。の。導。は。る。や。手。つ。け。ぬ。故。郷。の。山。迹。は。死。出。の。刻。の。
 山。今。う。ら。む。も。ゆ。た。と。ま。よ。別。れ。ぢ。外。任。半。七。は。年。進。代。り。て。死。ぬ。い。
 冥。土。は。在。る。婿。論。條。どの。と。婿。夫。の。半。六。の。へ。恩。報。一。が。外。任。の。い。や。
 あ。い。と。才。の。八。才。の。比。う。り。ら。れ。顔。も。認。ら。ど。外。叔。母。あり。とも。ら。ら。む。や。の。ら。
 い。わ。れ。ど。病。も。死。ば。冥。土。う。ら。む。婿。夫。は。面。を。背。身。の。罪。科。一。阿。鼻。地。
 熱。の。呵。責。も。い。と。ま。ん。べ。れ。は。惜。あ。ら。ぬ。身。分。今。意。中。で。存。命。な。れ。此。實。今。
 と。う。う。目。を。瞑。る。は。う。が。夫。次。四。郎。どの。生。涯。負。け。世。を。送。り。四。十。の。う。ら。

中ぞらちもあまのりも又吾侪が及ぶ伏し非命も死するもよらんとてこの
 流奔人をも苦しめ身を苦しめ造悪の報ひを以て推したるに
 父の仇人と指の天下のあらざれど孝かあらまは頼む仇人の外叔母を
 頼むにあらざれらの道理を辨て人を恨む身を恨む家を恨む
 若きを重むるといふ声次第は細きとも深きも居せぬ長りの物なり
 親も雄しく言えたるれば恨て改むる君もあはれ死んて言ふ
 賢者もとうとこれをめり親の晩年の老女もそれ死んて言ふ
 を恨たれ今恨をさるといふおの輪縁をさるといふ客らに微妙その子を
 教ふる男児も羞むる多しを主心の頼小けし膝より身を驚し耳を傾け
 首より尾まで乾かして嘆息し一もあはれおの如く因縁のあるばを
 一点がりのあらむものか母の世も在ん程の復讐言のりあひ後を

母ならんべかりはほくも禁めぬ婦人の仁とのとあひてげんのをさ
 告がりにまられあのが恨み実父の怨を復たとも更な養母を喪り孝道と
 られをせんや特は痛まを負ける親を草の上より居てその死を祈り
 喃母心を焦燥す長き一りのひひつゝ殊更に命も危むるべ夜風
 瘡口に入りて破傷風とあらるといひ療養終つたとわたりて負れぬ
 伴ひもいづとて立ちしを掻きりて改を掉虚気死をいふのる信んと
 らめよりいづも及ぶ身を傷らんといひ一りの果つ只惜むる親と子が
 其残由一世の列せりこれともせんさへ只吉ゆせうらあまの身のはと
 安くあへと草葉の蔭より祈るの南無阿彌陀佛と唱ゆめは子
 の血をうらりて呻喉又突立吭りて切刃を抱て敵と侮とむる隙の
 わら袴の袖のいとち朽ちする全女のりろと消るる草の上は

たる母の亡骸を抱死起し又啜咽更善悪もさざりが忽此儼と云ひ
 起しうら乱したる髪質の毛を拊むる襟の合し女をら及を扱よりつ
 亡骸より対ひ母の魂魄をば去らざらん今全女がまうんとをせしめんが父思
 人ありといふともその子うら仇を移るべしこれ父を否とるべし然れども今
 ら小志を果せんと死へ又養母へ不孝とわれ仇を移るべし仇を移るべし
 めるべし其一文一字を識らねど幸うて安るとありひじ唐山の豫讓
 と事らへ知伯が衣を刺て怨を復す例をどりこれ今羊と進ぐ
 橋子を打たれつ怨を復せよ擬ふべしされども阿容と存命ん
 へ人小わらば速く自叙し親の屍よりさうり共よこの野の大を肥え
 母の神良且く約る冥土の旅の郷導よゆされぬといひもあは諸祖は
 る血刀を腹へ突立んとさうりよらひもあはれど忽地背後へ人影しる

等子と一声母も果ごとと抱死とありん全女が髪を怪し身を
 反ら頭を回ら隈あれた月よえんへれがれ則別人あらん去年の秋を月
 六の月浪速より列しうら絶く音耗せざりける敗鐵児の四五六
 られがれそのものふとむりり且羞るのめところをさうら当十四五六を
 りりあく及を棄取く朝は納めつ只管は嘆息し今よ全女友とら
 交り竭せんが今よまたしを奇しくそをさうらめそれゆ不忠識
 小あめごとも去年の冬和主の母川を肩て竹地ともさう逃去り家
 もその次の日活業のひり啓行してこの大和路へ赴た六田下市をば揮
 つ吉野の林麓は春を迎へ睦月の下旬より標本は旅宿をせえそ彼此と
 あく駈あるげども和主親子とらうらうらにあらうふ志ん田中の里
 ある人のまて蕎麥食せん亭午より暮るるのりれりりかる半日

生業を止めり。彼処に赴き日暮る。ぬるるの松原まき。和主の母が
 枉死の顛末嚮うりうりゆめもあはるが。あはるつたをあらんとあひ
 了。彼処の樹蔭に幽室規をり共音を忍ぶ袖の雨たえて霽向のりし。
 宴に和主が母刀自の傳稀ある老女よそを又和主も男見られ後よはれぬ
 仇人とありて形る身身を恨む。自害せんとあひ定め。潔くはせぬれど。こ
 死が物死に常言ふの藤とも詮合つれぬの計較あり母の志よ
 悖らざ。和主が金を果せべ。あつても物死せまほ。き致とらひ全女容
 を改め縁由をあられ。今更匿むうもわらぬ定よあ身りかあ
 の産砂とこそあふれ浪華よの脱れがた恥を隠して路残を贈られ
 今亦必死のこれを救ふ。謀を授らるるを教を受ざらん説示あひ
 ねと飲ひのする目涙顔つ。土もあひがらるる。氣を引くと四五六を。

ほらうり小打り笑。こつてをを詮せんよ。過去に赤根が後者ゆり未
 了竊せむ謀の忽地浅ん。と精の道とら。密申す示とべ。この
 再貸ねと。あつ。密諾のうら點頭ちうら。今夜森本と虚空藏越
 の捷徑より。彼山へ走登。人志れど彼大力を。や音高し樹の木耳
 若も物の小憚あり。月の光も二更の過より。うら山路を走らる。丑三
 過る比及小必彼処に到るべ。ら。とをい。立れらる。ゆるがら全女を。
 母の屍をい。せま。と隣階間小四五六。倍とえ。る。遺櫃され究竟と枘
 引技に鎖ねら切。物より出。え。と亡骸を懸。納て弥陀憑む。これ
 悉辱の遺櫃。らうらる。あ。全女が肩は浅瘻へありら。母をら背
 負ひ。身を起。と所定ぬ野辺送り。母のへ去年の愛物結借残債を
 欺詐の権より。の實り。とありて。ある。熟れよ。かほ坂を越。大和の土

とある人を一評のひりき。死花うらぬ身のよき世の事あらうた
 秋とどひらきつ四五六を先へもちてぞやむく。清処は羊と進いのり

滝刀おのり

うらひのり

の神酒

これ酒

けり



半三進

の程小り帰る来々ん小松が中小身を借して。一五二をゆと張ひ今全
 女と四五六がさり去るをさへてあま出丹が死のほらりいくたひり索
 めぐりて。鮮血は漆たる順勝のぬん佩刀をぬ取てつうら戴たたよ

小挑燈高く揚新の著たる刀尖の血をうち返して。信とてさとのあやむ
 声とともよ。一町をりさり過たる全女も四五六も。せどろれみぢら入り止む
 月より明き挑燈を引提て。彼処に立人あり。あのが往方をあらまど



全女

四五六

あつともよ小石を搔廻て。葎矢と打バのやちぢん打あつ挑燈の火
 ころも先へ滅くちく。亡骸あら三人つれ足小信とて去去ぬ。

米谷の御塚

却説全次四五六の只管より走りつ。岩屋谷と虚空藏地のの間ある。山田のほとり小末よけを。月甲夜より隈あて。潜ぶよ便ちあらねど。途々申違ふを離さば。追人もいつてらまへ。小要時憇てあそ。又走りぬと。此彼九折る。樹下よ立ちつ。株よ尻をうけ。額の汗を。押拭ひるどとる。程よとるれば。花子のかゝる墓所より。山田の畔昔は新石塔建。當下四五六を。全次をえらうと。いつよわれをえらへる。秋今より。程も墓所のほとりよ。憇ふへ負たる母川の亡骸を。葬る因縁あらめ。さゆ重荷を背撓負て。路を走るよ自在ならじ。どうして天の明るべ。いつるもあひるけん。さうく唾ぬへと。しが全次を。今更よ。別ともさ小惜まこ。何とも回答難たじ。が。敬回歎息。大に

母の本貫あれども。しが身よいるる旅より。それが葬のよ。憇むべき寺も。この処へ亡骸を。藏めまおらせん。便宜よ似たれど。引導読経の声も。ゆせせん。捨るが如く。瘞んぬ。その子と。うて。忍びびく。それも火急の一大事。ふ。ひく。う。う。と。あらば。ともせんが。鋤揪あんと。も。齎まは。人よ。借んも。更閑く。人家へ。いつとも。違り。とのせも。あ。び。る。その。さ。ろ。易く。ん。あ。へ。彼。処。の。土。を。穿。起。し。う。う。く。穴。を。掘。た。る。り。右。手。の。卵。塔。へ。倚。わ。け。た。る。鋤。整。ひ。忘。ま。て。あ。け。る。物。と。ん。由。よ。か。ま。れ。い。わ。さ。り。ある。里。人。の。死。た。る。を。盟。の。且。胸。よ。葬。ん。と。き。甲。夜。より。藤。て。張。里。坊。よ。揚。せ。る。安。ら。る。べ。し。と。憇。ひ。し。が。あ。り。り。それ。彼。安。を。え。ら。う。り。か。か。ま。れ。い。わ。さ。り。母。川。を。ら。の。処。へ。葬。べ。れ。因。縁。の。あ。り。けん。と。い。ひ。し。加。禰。今。夜。米。谷。へ。赴。く。と。も。木。精。塚。を。掘。起。さ。鋤。整。ま。く。と。室。の。山。へ。入。り。空。く。帰。る。が。

如し。ちう係小今由こまあ。鋤整さよ獲たるる。天の賜あらさ。竹を
 志がらるる。と説諭せよ。全女有。理と點頭。遠く澄櫃を扛わろし。
 件の盤をうり取し。別穴を掘んとするを。四五六急。推とめ。全女よ。
 噫。和主の律義ある。りのぞか。と。埋よ。と。いぬ。ぐり。掘たる。穴の
 一の空を掘とも。の時をうらまん。今。其処。葬ら。人の墓を竊
 る。天も明。忽地。は。舊の。和主。掘捨られて。終。材の腹を肥さん。
 僅よ。一を知さ。ま。その。二を。あら。ぐり。り。と。又。此。処。の。寺。内。に
 あら。と。一。の。墓。所。を。あ。め。く。定。る。主。あり。て。他。々の。葬。を。い。は。り。も。許
 さ。と。あ。ら。と。い。は。り。の。亡。骸。を。この。ほ。と。埋。が。し。と。や。棺。は。埋。る。と。も。

新よ掘たる。壤の。蹟。の。ぬ。の。ぐ。あら。ら。る。べ。里。入。示。れ。を。て。或。の。疑。或。の。性。
 終。小。これ。掘。起。さ。ぶ。却。て。母。の。亡。骸。の。行。処。捨。られ。ん。も。又。量。や。じ。あ。る
 小。今。の。空。へ。葬。る。と。い。は。れ。彼。和。主。縁。故。を。向。む。り。鬼。神。あ。ん。ど。の。せ。り。と
 う。と。お。な。れ。惑。ひ。と。あ。く。小。掘。も。く。ま。と。彼。新。葬。の。ろ。ろ。も。に。叮。嚀。小。菩
 提。を。終。ん。故。と。い。は。れ。一。錢。を。費。さ。ざ。と。親。の。あ。り。親。経。は。
 永。く。菩。提。を。終。る。と。又。儔。る。は。好。事。ら。ら。ざ。ら。れ。身。前。穴。を。穿。く
 する。謀。と。い。は。れ。あ。り。と。ほ。と。う。と。説。示。せ。ば。全。女。の。い。は。ら。の。堂。を。掘。地
 と。拍。寔。し。身。の。吾。黨。の。文。珠。あり。可。惜。男子。小。賣。鐵。を。さ。る。る。と
 よ。と。唱。嘆。し。遠。よ。母。の。亡。骸。を。件。の。穴。へ。か。さ。め。小。り。れ。四。五。六。さ。う。ひ。く
 ぐ。整。り。て。壤。を。西。復。ひ。く。押。さ。し。踏。着。く。と。傍。よ。り。除。ある。石
 塔。を。持。て。上。居。太。山。檜。の。枝。折。ら。り。と。墳。墓。の。左。右。挿。し。く。

回向志のつとを全女のあまひ濡と袖の露を拂ひぬりて額つた
 くの身ひひらたもるた親の後の世せめて女と念ざれ四五六も孫
 陀佛のつとを返りたる芋環の糸あらまゝのつとを公ほそ
 とも命まゝぬわけて全女のうら念いづら念いつ頭を擡彼石塔を月
 光よとんわうんて眉根をよその彫著なる方ある文字の見あらた
 公持ぞとる四五六あん身まの誦やせん誦ぐらてゆせぬといひ間ら
 透し見え文字を墨まて染たる夏雲独峯信士とあり又逆朱
 を入れたる春月清光信女とありこれ正しくその妻を頃目身まらり
 たりあら親族らへ送葬しま同堂一埋んとて豫て穴を掘せし
 ありといふをせせけく全女のつとを小膝を破と打て不思議あるも
 わりたり。つとを養父女四郎との戒名を夏雲独峯とすつとありつと小

石塔よあるが戒名あつたのつとある夫婦とおなじく逆朱を入れた
 春月清光と彫著なるその空つとを母を葬るつと前の世より
 この山圃の主とある因果小つとををせせらつとつと戒名をとりも用
 つとを母を春月清光と稱へん奇なり奇なりと只管は嗟嘆して
 己がれは四五六も今さらつと脱止ぬ後の友がれをさ小結びしつとせら
 されは四五六が思い量つとつと一点錯びの空を掘せしつと虚空土藏の
 属村ある大象地の毘毘法師木阿弥陀佛といふのつと父の某甲の
 十九箇年前の世を逝て母のつとが六十の春の夢とえて病煩ふつと
 もあり一夜寝死つと死よければ木阿弥陀佛哀悼し堪を父の空つと合
 葬んとて今宵つとその空を掘らせと黎明の比及又里人とつと光小
 棺を昇りてまゝえれが掘り穴埋てありつと竹のり夜の中よありつと

あつらんと怪しく。あさび瘰癧を掘起せば、瘰癧の内は枉死の老女を納
たるなり。年の齡は木阿弥陀佛が母と等しく見えたるも、誰とらねり
後ざらん。この何れの所ありや。とすべく疑ひ惑ひつ。絶主も道者も立
はどひて呆るもあり。かそくもつり。只より捨つと罵るものなり。當下
村長且尋思し。木阿弥陀佛はよいか。大和の國のちぬあれと神
武天皇以降化の安を棄て。母が葬をせしむをすく。顧みさら
の高峯より鼻の高はつ。祿達多より。こまなく鼻高殿の野あり
べ。さかを後の崇をもつらば。腹たし。こころも捨るべ。却て大なる殃
危まやのべからん。只この瘰癧ある亡骸を。舊の如くよく瘞す。その
ほろへ母を葬し。花をま向るとなり。りろとも小の向寧都婆を建る
日あり。りろとも建とて。此彼一體の思ひをす。苦提を修む。こころ小

まいたる。能識鬼のわら下。あつせん。ま崇もあつ。その功徳よ。うそ母の
り。母も現當二世安樂疑ひあり。と説示せば。衆皆有理と稱賛
し。聽て晚稻が亡骸を舊のどく小埋つ。その傍に穴を掘り。木阿弥陀佛が
母を葬す。母の石塔を新に建て。戒名を彫著たり。とていへり
の人の公ざる。素朴ある。よ。うたて。山あり。小縣小く人々
の言を推さば。をり。木阿弥陀佛の村長が教。時ら。亡骸
を。竹処の誰とらねども。り。母と。共。香を焼。花を。月忌
年回の追善を。い。行ひ。善根を。植。後
彼亡骸を全収が母とある。の。身。稀。幸。ひ。是
ら。先。近。の。田。夫。牧。童。縁。由。を。怪。大。象。有。木。阿。弥。陀。佛
が。母。の。葬。り。と。亡。骸。が。り。小。り。ぬ。世。小。離。鬼。病。と。形。貌。の。あ。る

小元ゆる病ありとくせいで。死しつて骸のふらふらとよめるとのふめいせも
 及ぬ死事とせめてえらう。あやが戒名を彫著たる石塔が並びて有るを
 とく。殊更よひのありたり。あやが親よ彼空よ埋たじまはれ死骸の
 主出するところ近々の後又とらうを侍く。受原末木阿弥陀佛が母の魁
 のあやふらうたつあわらむ。よろくもせたるものうみとて果は笑て己よ
 けれど。その夕遂に入口は膾炙して。舊の主の出る壁言の必元の木阿弥
 とくせいで。その謗の監觸の塩尻の明王百穀編も裁られたれど。小
 説とくるところその大同小異。且塩尻の頃慶の時のゆくとく。木阿弥
 陀佛が母のふらよ話あり。却説全女の母を侍既よ葬らる。今の後争とて
 四五六のりうともよ。彼鋤盤を携はす。又只愛よ走る。親よ辛くとも
 米谷ある。木精塚のほとりよまよひり。あつれども。あやが天の明と。喘も

中(と)きりよけれは。石湯を結びて。咽喉をうほほ。さて全女の四五六よ
 對ひ嚮まゝの遠く。て全くあん身が謀をせ果ど。よろ行ふべらう
 を。説あら。ゆ(と)け。四五六。それば。羊と進小先。さら。その
 塚を掘起。彼風流士の太刀を奪ひ取る。それゆ。その針。羊と進が身。単
 小や。ま。あ。ら。和。主。の。手。を。も。や。さ。ん。実。父。の。怨。を。復。さ。よ。あ。ら。び。也。
 時。の。泊。が。く。失。ひ。易。し。う。し。く。と。促。せ。ば。全。女。せ。き。う。う。く。飲。ひ。かん。身。が
 謀。究。く。妙。あり。彼。大。刀。失。る。が。羊。と。進。の。生。き。平。城。へ。の。歸。を。せ。よ。ん。
 一。平。阿。容。と。歸。る。とも。続。井。殿。の。怒。烈。く。て。女。穂。小。の。あ。べ。が。ら。ん。
 母。の。今。般。の。言。の。お。小。情。ら。を。く。と。怒。の。乃。の。彼。風。流。士。よ。ま。ら。り。の。あ。
 さら。と。く。整。柄。握。り。ら。向。上。る。お。山。深。く。檜。赤。松。生。茂。王。簪。竹。が。下。の
 水。の。音。も。委。ぬ。ら。る。潔。れ。朱。の。玉。離。上。久。く。塚。の。左。右。よ。禿。倉。の。り。彼。首

百何後日記

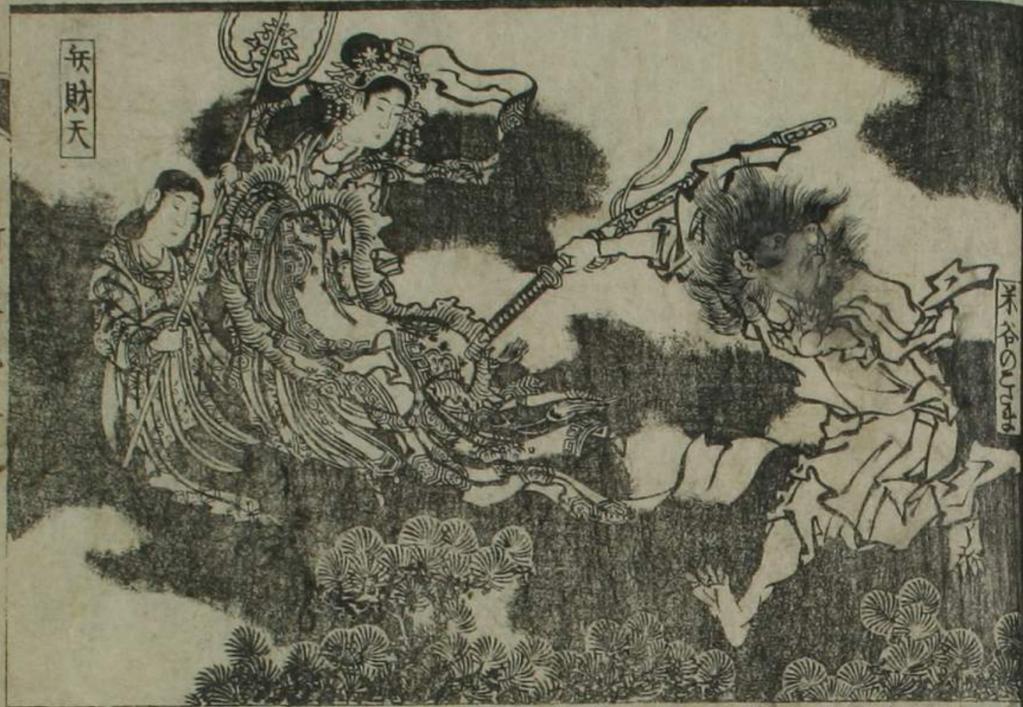
七十四



ひまりの天

二天禍を授く
風流士の大カ
西(赴く)

是首とえ久しむ。両社の鳥居も額
を打て辨財天女毘沙門天と筆太
写したる。金子の月照をひて尊
由のれど今宵より。公も着たる蓑衣
の汚れ致忌て近くも来れらば挽
たる楠の土より上一丈
をうらむ。
大く石も化
たるを。舟で碑石
小用ひつ。木精塚の
三字を彫たり。それを



辨財天

掘護んよ。一や百人
ららるを借
とも一朝一夕よ
るべうのむらど。
四五六も全ぬも。その外の外のみおぼえ
る。只忙然とまほりてをう。あくと止
べたよあらね。さうともとよひえい。
まづ試む。楠の株のあられたる間
を掘るよ。正よ是風流士の大カ。再び
人間へ返るべた時。ちのりらん。おのま
似を株の朽じ。まをたを塊よひと。西人の



これ又勢ひつれて息をも絶せしむるほど小土中五六尺をくりはして果し
物の見し見あらんと競ひあつてさうして引出せば紛ふまじりぬ宝
銀の唐櫃に殘雪の凍より夜に山風膚を徹し狼のま音公宗言
も骨栗然とくりりるれどそれを骨とせん。兩人のまらり力を戮せ
を操断てそれをえらに管三重とあがりと。櫃の中は又管ありその横をも
ややねら放と第三の管は至までつすれども蓋開くべからぬの
るよ時を病と山路まき夜をわたり半之進ホもあられぬ謀り
も仇とありあん兵打碎けと四五六がかり揚る打鋤いよひのかり
反ふる間を抜と全女が整柄高く破と打丁と葦石と数回打れ
管の碎れ風流士の大刀頭と出たり。そればらをとと全女が取らんと
するに奇ありる塚の中より吹出と魔風頻に面を打彼風流士を

中天吹揚とをえたり大刀の須臾内たつ。平城のわさ盡まらんと
時、毘沙門堂の扉さると崩れ。異相の天王忽然と立ちあがり
その長た稍を取て面を怒らし眼を睜と虚空通に閃たゆ。大刀
を追葛追戻し合たる稍をとり伸と打落さんとあゆの大刀の追
とて整ふる千城のわさひりもあか人舊の安へらんとすれは蟬蛸たる天
女辨天堂の上は立ちあがり抱る琵琶の撥をりて徐女小振らうこれを
取らんとあ折魔風とび吹暴れ。月さ暗くあるまら大刀の
顔小光を放らその声絹を裂と。西を投てを赤まける正は曼天王
天女の擁護ふらつて。順勝の身はあゆりけるその禍を西へつて
今茲八月下旬大内陶が牙小保る家の乱を今とあやあやの塚の
鬼小鈴とせん全女も四五六もあ小りる。鋤整撲地と擲捨て酔吻が

南木後言卷二

如く醒^さふ^まど^く張^はつ^めめ^がを^あか^むむ^らの^りと^り月^づの^西を^瞻仰^て
ほいあより。
刺田

占夢南柯後記卷之三終

蓬取蘭叢取

